

野坂昭如著「戦後66年は砂上の楼閣 震災5か月、8.15からの眼差し」日本経済新聞2011年8月6日朝刊文化欄を読む

1. 「空襲と震災のもたらした光景は、はっきり違ふとぼくは思う。今回、被災地以外の者は地震の怖さをわが事として受け止めた。一方で買い溜め行為もみられたが、被災地への関心は高く、善意も集まった。今はどうか、多くの人にとって、気になりつつも眺める対象でしかないのではないか。福島原発事故に関心に移ったせいもあるが、復旧もままならぬ被災地と、何事もなかったかのように日常を送る地域。光と影の差は甚しい。
2. 焼跡のスタートはゼロから始められた。それに高度経済成長が伴った。この度はゼロに戻すことから始めなければならない。経済は疲弊している。ここにいつ収まるともつかない放射能汚染が加わる。」と。
3. 戦後六十六年を経て、かえりみれば被災地だけじゃない、都会もまた紙一重で明日は焼跡じゃないか。文明に囲まれ、物質的豊かさの中で暮らし、飽食の時代とやらを過ごす。しかしすべて砂上の楼閣。ただ今の暮らし、電気がなければお手上げ。原子力推進派のいう電力不足は脅し的一种だが、仮に三日も停電すれば、日本はガタガタ。この電力システムはお上先導のもと進められたとはいえ、世間もまた、便利が一番と受け入れてきた。
4. 四季の移ろいやさしい列島に住みながら食べ物は外国任せ。海の向こうが不作に陥れば、あるいは損得の駆け引きによって輸出取り止めとなればたちまち飢えに苛まれる。つまり他国の胸三寸で、日本は生かされも殺されもする。
5. 昭和二十年八月十五日は敗戦の日。今や単なる区切りにもなっていない。戦争を思い出すのは夏だけ。それさえあやふや。忘却は人間の力でもある。しかし嫌なことは忘れ、戦争を引きずるな。平和、豊かさ、モノの時代とやらに明け暮れるうち、大事なものをどこかに置き、長生きこそ良しとしてきた。
6. 平和を唱えていれば生きていける。その平和な国で、自殺者は増え、食いものは危っかしい。空気は汚染され文化伝統は薄れるばかり。豊かさと引き換えに失ったものは大きい。この度の震災は国難に違いない。今こそ、日本人一人一人が立ち止まり、考える時である。

#### [コメント]

1930年に鎌倉市で生まれ、養子に出、神戸で育ち、1945年6月神戸大空襲で養父が焼死、養母は重体、敗戦後1週間で妹が餓死、その体験を基に書いた「火垂るの墓」と「アメリカひじき」で1968年に直木賞を受賞した野坂昭如氏の受け止めた震災と敗戦をつづったこの文ほど考えさせられるものはない。80歳になるまで敗戦の現実を忘れず、戦後「焼跡闇市派(やけはたやみいちは)」作家の面目躍如の文。有り難い限りだ。

